

手話言語の動詞一致とその関連現象

川崎典子

(東京女子大学)

手話言語の動詞一致は、音声言語に見られる一致現象とは非常に異なる特徴を示す(Padden 1983, Mathur 2000, Meir 2002 など)。(i) 音声言語には屈折言語から孤立言語まで一致の有無に関して多様性が見られるのに対し、手話言語では報告されている限り（非常に若い言語を除き）すべての言語に動詞一致が見られる。(ii) 一致現象を持つ音声言語ではすべての動詞に一致が現れるのに対して、手話言語の動詞一致は一部の動詞に限られている。(iii) 音声言語では主語と述語が一致するのに対して、手話言語の動詞一致は目的語との一致を示す。(iv) 手話言語の一致現象には、音声言語の場合のように時制辞などの機能範疇の関与をうかがわせる特徴がない。(v) 音声言語の一致には指示対象を同じくする代名詞の発音との関連が観察されないのに対し、手話言語の動詞一致では代名詞の指さしと同じ R-locus が使われる。

手話言語の動詞一致に見られる特徴は、優先度の高い制約に違反しない形が最適として選ばれんとする最適性理論による音韻論のもとで、手話言語では「音節の表出を避けよ」とする制約の優先度が高いという仮説から導くことができる(川崎 2015)。この制約は、調音の負担軽減という諸言語に見られる傾向(Kirchner 2004, Napoli et al. 2015)の一例と考えることができる。手話言語でこの制約の優先度が高いのは、Bellugi and Fischer 1972, Klima and Bellugi 1988 に示されたように、手話言語では、ひとつひとつの音節に時間が掛かるためメモリースパンが短いことによると考えられる。音節の縮約は音声言語の口語体にも観察され、以上の分析が正しいとすれば、手話言語には、統語レベルのみならず調音・認識インターフェイスにおいても音声言語と同じメカニズムが関わっていることになる。本発表では、この分析に基づき、新しい手話言語に動詞一致現象が生まれる条件を提案し、さらに、この分析の帰結として日本手話に見られる複合語の短縮やアスペクトマーカの縮約が導かれることを示す。

参考文献

Bellugi, Ursula & Susan Fischer. 1972. A comparison of sign language and spoken language. *Cognition*, 1, 173-200.

川崎典子. 2015. 「手話言語の動詞一致のメカニズム」日本言語学会第 150 回大会研究発表

Kirchner, Robert. 2004. Consonant lenition. *Phonetically Based Phonology*, ed. by Bruce Hayes et al. CUP. 313-345.

Klima, Edward & Ursula Bellugi.& 1979. *The signs of language*, Harvard University Press.

Mathur, Gaurav. 2000. Verb agreement as alignment in signed languages. MIT dissertation.

Meir, Irit. 2002 A cross-modality perspective on verb agreement. *Natural Language and Linguistic Theory*. 20, 413-450.

Napoli, Donna Jo; Nathan Sanders, and Rebecca Wright 2015. On the linguistic effects of articulatory ease, with a focus on sign languages, *Language*. 90, 424-456.

Padden, Carol A. 1983. Interaction of morphology and syntax in American Sign Language. UCSD dissertation.